

## Лорд-Ленин в Лондоне ロンドンのレーニン卿

アレックス・ゴリドファルブ Алекc Гольдфарб

Из книги “САША, ВОЛОДЯ, БОРИС... История убийства”

「サーシャ、ワロージャ、ボリス... 殺人の物語」

2010年出版 アレックス・ゴリドファルブ マリーナ・リトビネンコ共著から

© 2010 Alex Goldfarb, Marina Litvinenko

モスクワのインターネット新聞「New Times (NovoeVremya 改題)」掲載

<http://newtimes.ru/articles/detail/20693>

リトビネンコ毒殺から3年が過ぎ、彼の友人たちは殺人の理由と2006年10月7日に、レスナヤ通りの自宅の入り口付近で殺されたアンナ・ポリコフスカヤの死亡との関連を解明した。彼女の死体の傍らには、投げ捨てられたシリアルナンバーを削り取った消音装置付きのピストル一丁と、うち2個の弾丸が彼女の命を奪った銃弾の薬莖4個が発見された。この襲撃事件は、ロシア連邦大統領の誕生日に発生した。女性記者殺害を評してボリス・ベレズフスキーはこう評した。「ロシアは多神教の時代に回帰しようとしている。これは、明らかにプーチンに捧げられた、儀礼的殺人だ。」「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙の同僚記者たちや、アンナの家族は、殺人に関する3つの可能性を真剣に検討してきた。

その第一の容疑者は、ポリコフスカヤの記事執筆により、チェチェンにおける非戦闘住民への蛮行を裁かれたハンティ・マンシスクOMON(特別任務民警部隊)司令官の仲間たちであった。この司令官は、収監中に獄死した。彼の友人たちには、アンナを憎む理由があった。

第二の容疑者は、殺害前1ヶ月、ポリコフスカヤが痛烈な批判を浴びせていたラムザン・カディーロフであった。彼女が射殺されたのは、カディーロフの私的留置場における拷問の実態のセンセーショナルな調査記事を印刷に送り出す予定の2時間前であった。

第三の可能性は、ライバル関係にあるFSB(ロシア連邦保安庁)のチェチェン関係者たちが、スキャンダラスなプーチンのお気に入り、カディーロフをハメて、連邦大統領をして、彼を排除するよう仕向けようと、仕組んだというものであった。FSBのチェチェンエージェントたちと著名な対露協力者たちは、カディーロフが、共和国内での彼らの活動を締め付けていることに不満を持っていた。彼ら競合者たちは、国際的にも有名な人権擁護活動家でもある女性ジャーナリスト殺害の汚名をカディーロフに被せて、プーチンが、彼をと想定していたチェチェン大統領の座に就けなくすること狙ったというものである。

これらの可能性の論議は、後に現れたもので、アンナが殺された当初は、次の二つの声がまず上がった。一つは、クレムリンからで、もう一つからはロンドンから、証拠も、事実を検証するも待たずに、互いに罪をなすりつけようと名指しあった。

最初に口火を切ったのはプーチンだった。10月10日、ドレスデンでの記者会見で、彼はアンナ殺害をコメントして、「幾人かのロシア司法当局の追及を逃れて外国に身を隠す輩は、ロシアの名声を傷つけ、反ロシア感情を醸成しようとして、犠牲者を出すことを企んできた」と、語った。

「ポリコフスカヤ殺害は、彼女が書きたてた記事以上に、(われわれに)大きな損失をもたらした。この事件は、わが国と、その現政権に向けられたものだ。」プーチンの演説はインターネット上のビデオアーカイブズでの、感情を抑えられなかったときに、憎しみを発露させた不滅のシーンの一つとなっている。彼は、自分の目の前にいるのが、記者会見場に集まったジャーナリストではなく、ロンドンで陰謀をたくらむ敵たちの大ボス、ボリスであるかのように見えた。そして、彼らこそが、彼個人を陥れようとアンナを殺したと信じ込んでいるかのようにであった。

一方、サーシャ・リトビネンコは、プーチン自身を犯人と名指した。彼が、戦争報道関係者の集う、ロンドンの「フロントラインクラブ」での発言もまた、インターネット上で容易に見つかる。「私は、アンナを殺したのは、ロシア連邦大統領、プーチンだと断言する。」と、静まりかえった会場にサーシャの声がひびいた。「私は、あらゆる裁判において、それを証言する用意がある。皆さんは、私がそう発言したと記事にして構わない。」それは、彼が毒を盛られる9日前のできごとだった。これら二つの発言は、証拠の裏づけ無しに感情的に発せられたものだが、サーシャ殺害を前にして、クレムリンとロンドンとの間の憎悪が如何に高まっていたかを物語るものだ。

2007年春、ロンドンにて

リトビネンコ殺害容疑者、アンドレイ・ルガヴォイの引渡しをロシアが拒むことは、明らかと予想され、ロンドンの公式筋はそのことを織りこみずみで対応していた。が、モスクワに対する容疑者引渡し請求の送達後、まもなく、今度はベレゾフスキーを殺害しようとする人物、が現れた。これには その前の秋のショックから まだ立ち直れないままだったイギリス当局は当惑しきっていた。スコットランド・ヤード(ロンドン警視庁)のお陰で殺害は阻止されたが、この事件はクレムリンとホワイトホールの現実の前にある通常の眼では見抜けない幕を僅かに開いてみせ、サーシャの殺害にポルトコフスカヤの死と一つのつながりの中にあるという、更に別の局面を加えた。

.....

2007年6月16日、マリーナとわたしは ドイツ語版の我々の本(邦題:リトビネンコ暗殺・早川書房)のプレゼンテーションを終えて、ハンブルグから ロンドンに飛んできた。これはサーシャを亡くして初めてのマリーナの誕生日で、アフメド・ザカーエフが、皆をバーベキューパーティに招いていた。我々は空港から彼のところに直接乗り付けるつもりだった。我々を事務所の「ベンツ」で迎えた運転手のジャックがもったいぶってこう知らせた「警戒すべき事態です。スコットランド・ヤードからジェイとコリンが来た。戦闘準備をしておけと命じていった。何処にもよらずに、みなさんをザカーエフ氏のところに直接お連れするように、ベレゾフスキー氏は 安全なところにいる」と言われました」。運転手はこれ以上なにも説明ができなかった。

ザカーエフのところに着いて更に驚いた。彼の家の小さな庭でバーベキューの準備をするのに警察の警備がついていたのだ！招かれた人たちのほかに用心深い目つきの屈強の若者数人とテロ対策部の警察官ジェイが居た。「どういうことなんだ？」とわたしはザカーエフに訊ねた。

「スコットランド・ヤードから人が来て、モスクワから更にもうひとり殺し屋が到着した、とかいう捜査情報があると言った。ボリス(ベレゾフスキー)には2週間ばかりどこか安全なところに行っていると助言があり、彼はイスラエルに飛んだ。そしてわたしには警備をつけたってわけだ。今日、連中はここに泊まったほどだ。警備というより待ち伏せって言う感じだな。皆私服で、車の外見はパトカーには見えない。ちなみに ロンドンの警察は普通こんなふうには隠れたりしない。」

「君はそれを信じてるのか？」と わたしはザカーエフに訊いた。

「信じられないが、サーシャにあんなことが起きたからには どんなことだってあり得るさ」。

戦闘準備状態はほぼ一週間続いた。その後警察は姿を消し、わたしもボリスを待たずにニューヨークに戻った。ボリスはまもなく、イスラエルから帰ってきたが電話でこの話を詳しく話そうとせず、「警察に頼まれた」とだけ言った。そのちょうど一ヶ月後、英国特務機関の消息筋が 新聞に詳細を漏らした。暗殺が準備されていることについて、彼らは信頼できる捜査情報から知った。殺し屋は8歳の息子と一緒に6月の初めにモスクワからやってきて、「ヒルトン」ホテルに投宿。彼はボリスと会う算段をして共犯者の協力を得てピストルを買う話をつけた。しかし、「A氏」(と新聞は呼んでいる)は拘束され、ロシアに強制退去させられた、そのことは警察が公式に認めている。それからしばらくして「コメルサント」「エコー・モスクワ」が犯人の名前を明らかにしている。それは53歳のモヴラジ・アトランゲリエフ という ラザンギャング団の創設者の一人で、その後あきらかになったのだが、ポルトコフスカヤ殺害の中心人物の一人だった。

これでスコットランド・ヤードの諸君が危険をあれほど深刻に受け止めた訳が分かった。マクス・ラゾフスキーが死

に ホジ=アフメド・ヌハエフが外国に出た後(かれが最後に姿を見せたのは2001年トルコで、2004年には、彼が殺されたという報道があった)、犯罪者仲間では「ロード」とか「レーニン」の名で呼ばれていた、アトラングリエフは、ラザンギャング団の最初からのメンバーで、頭目たちのうち最後の生き残りだった。表向きには 不動産業を営み、モスクワでもっとも有名なチェチェン人のひとりだった。

裏ではFSBのエージェントで「特別任務」の遂行者だという評判があった。ラザンの親分の、誰もが認めている最大の手柄は、第二次チェチェン戦争の山場でグデルメスの野戦司令官であったヤマダーエフ一家を、ロシア連邦軍側に引き込んだことだった。1999年の11月の白熱した時期に、アトラングリエフは ヤマダーエフ兄弟を説得して、戦闘なしでグデルメスを明け渡し、ロシア政府側につかせた。

プーチンは当時、この兄弟をかわいがり、ロシア英雄の称号をあたえ、1000人からなる、その軍団をロシアの軍服に着替えさせ、「ヴォストーク(東)大隊」としてGRU=陸軍情報総局特殊部隊に編入した。司令官は中佐の位で スリム・ヤマダーエフになった。ヤマダーエフ一家の長たるルスラン・ヤマダーエフは チェチェンの(プーチン与党)「統一ロシア」の党首とロシア下院(ドゥーマ)議員にされた。ヤマダーエフ一家を「懐柔」したアトラングリエフはその褒美に名誉賞をうけ、名入りのピストルを FSBのパトルシェフ長官から直々に授けられた。それ以来、彼はFSBのチェチェン関連の主要エージェントとなり、プーチンに直接報告するときにも、同席したことがある。彼はモスクワで豪勢な暮らしをしていた。マスハードフ政権のもと官房長官アプチ・バターロフの「アトラングリエフは広大な屋敷をもっており、その内装には数百万ドルかかった、地下のガレージには 最新の高級車が4-5台止まっていた」という証言がある。そのバターロフは、その後英国に亡命したが、2001年にはFSBの副長官ウグリュエフとアトラングリエフが話しているのを目撃している。このウグリュエフはサーシャ・リトビネンコが モスクワの1999年の連続爆破事件の犯人と疑っている人物で、バターロフの印象では「この二人はずっと前から かなり懇意にしている」ということだ。

しかし、 ザカーエフの情報では、アトラングリエフは、2006年の夏から とても危険なゲームに手を染めたらしい。ラムザン・カディーロフが30歳を迎える日が近づくにつれ、プーチンが約束したチェチェン大統領の座が近づくにつれて、ロシアの特務機関と結びつきのあるチェチェン人の一団は、どんなことをしてもカディーロフが大統領に任命されるのを阻止し、ルスラン・ヤマダーエフを大統領に据えようと考えた。アトラングリエフはこの企画の中心だった。この一味の最大の課題は、プーチンにカディーロフを諦めさせることだった。

まさにここで、アンナ・ポリコフスカヤの殺害を「反カディーロフ派の仕業」説に従えば、陰謀家の一団には、この女性記者を殺害し、その容疑がカディーロフに掛かるようにするという計画が生まれたのだ。暗殺はわざわざプーチンの誕生日に重ね、プーチンを特別に怒らせる効果を狙った。だれもが カディーロフがポリコフスカヤを憎んでいることは知っており、確かに あの殺人事件のあと世界のマスコミや人権擁護者たちはカディーロフを最大の容疑者と疑った。

しかし、よくあることだが、結果は予測できないという法則が働いた。ポリコフスカヤは自分の記事でプーチンをカディーロフに劣らずたびたび名指しで非難していたし、サーシャ・リトビネンコに劣らぬ陰謀家である大統領も、アンナの殺害をロンドンが仕掛けた自分に対する妨害工作だと考えた。しかも、プーチンは、アラーに誓ってポリコフスカヤ殺害に自分は無関係だ、と言うカディーロフのことは信じた。そしてFSBの上層部は、プーチンに、この計画を立てた陰謀家たちとはまったく違った風に、この殺人を報告した。 どんな報告をすれば大統領の気に入るか、承知の上で、チェキストたちは、「ロンドン」容疑者説をもっとも可能性が高いものとして提案したのだ。

リトビネンコが毒をもられて三ヶ月後、「ニュー・タイムズ」誌はイリヤ・バラバノフとウラジーミル・ヴォロノフ両記者の調査の結果を公表した、そこにはクレムリンとFSB高官によればという次のような引用がある:「大統領の誕生日10月7日の(ポリコフスカヤ)殺害は、まさに大統領への当てつけと判断できる。既に10月8日、アンゲル・メルケル、ドイツ首相との会談が行われるドレスデンに出発する前に(プーチンは)治安機関の指導者たちを集め、彼らはこの犯罪がベレゾフスキーによって計画され、それをリトビネンコに実行させたのだと報告していた。この報告によると、リトビネンコは昔のつながりを利用してチェチェンの武装勢力と連絡をつけ、チェチェンの武装勢力が今回の殺害を実行した」と。

まさにこの10月8日の会議で、プーチンはチェキストたちにサーシャ殺害のゴーサインをだしたのだ、とバラバノフとヴオロノフが書いている。

「社内の記者たちが使った素材について自分の筋から調べたが」と「ニュー・タイムス」のラフ・シャキロフ編集長は西側の記者たちに語った一大変レベルの高いふたりの情報提供者がこの情報の通りだと認めた。数名の情報提供者は FSBのボルトニコフ副長官が指揮してリビネンコ殺害の計画を練った、と知らせている」

この記事を発表する前にシャキロフはクレムリンと特務機関に書面を送りそれぞれの見解を求めた。回答は来なかった。プーチンはポリコフスカヤ殺害「ロンドン説」をドレスデンで10月10日に公表している。一週間後、ロンドンには 死の荷物をもってルガヴォイとコプトゥンが到着した。最高権力者からの殺害命令はどのようにだされるのだろうか？歴史が示すように、そのような状況で畏れ多い注文者たちの最大の関心事は、「否定可能性」を確保すること、つまり命令が どのような具体的な責任も問われないような形で出されるように仕組むことだ。最高位に居る者の立場は特別なので、彼(最高権力者)はいかなる場合にも「それは命令だったのだ」などとは言えない。スターリンは肅清をおこなうのに自分の名で命令をだしたことは一度もなく、必ず「政治局の決定」があった。ウクライナのクチマ大統領の執務室で保安部メリニチェンコ少佐が隠し録りした音では、クチマ大統領はゲオルギー・ゴンガゼ記者を殺害しろと命じてはおらず、ただ、クラフチェンコ内相に「このグルジア人をなんとかしろ」と頼んだだけだ。その後ゴンガゼは殺され、内相はピストル自殺し、クチマの擁護者たちは、「大統領は全然そんなつもりで言ったのではないのに、治安機関が勝手な判断をしたのだ」と主張した。

最高権力からの「殺し」のような注文で「否定可能性」を確保するという伝統は、古文書によれば1170年12月に、英国王ヘンリー2世が「このしつこい坊主がわたしにつきまどうのをやめさせてくれるものはないものか？」と、のたもつたことにさかのぼる。国王に好意的でないカンタベリー大主教トマス・ベケットのことを言ったのだ。まもなく ベケットは教会の中で4人の騎士たちによって刺し殺されてしまったが、この騎士たちは「国王の意図を勝手に解釈した」のだったとされた。

ヘンリーの「身分の低い僧侶がこんな風に君主を侮辱することが許されているということは、なんとという裏切り者とくだらない者を私は育て上げてしまったことよ！」というより細かい言動をあげる歴史家もいる。まさにこういうやり方で、ロシア大統領は その忠実な配下であるチェキストたちに合図を出したのだと考えられる。彼らは、大統領の誕生日を傷つけるために、その日を選んでアンナは殺されたのだ、という報告を持ってきた。ポリコフスカヤ事件を扱っているロシア最高検察庁の捜査官たちは、なんとしても殺人者をみつけだし、ロンドンの黒幕との関係を証明することにゴーサインを得たのだ。実行犯は半年で確定することができた。ラザンギャング団のメンバーだった。逮捕されたのは 暴力団の下っ端で女性記者を尾行していたジャルライル・イブラギムのマフムドフ兄弟と、二人のためにピストルを入手したとされる警察官セルゲイ・ハジクルバノフだった。アンナの作戦にマフムドフ兄弟に指示をあたえたハジクルバノフの同僚のFSBのパーヴェル・リャグゾフも逮捕された。長兄のルスタム・マフムドフは 直接の殺害犯だが、かれは指名手配になった後に、FSBのだれかの助けによって手に入れていた偽造パスポートをもって海外に身を隠した。

クレムリンの指示に従って、公式の捜査はかなりながく「ロンドン説」の容疑者を見つけ出そうと試みていた。検察の高官は ベレゾフスキーではないかと言い続けた。2007年8月に、ユーリー・チャイカ検事総長はマフムドフ兄弟の逮捕を告げて、この事件の黒幕は「海外に住んでいるあるロシア人であり、殺害の動機はプーチン大統領の顔に泥をぬることだ、とあからさまにベレゾフスキーをほのめかした。捜査局長ドミトリー・ドヴギーは本人が2008年4月に収賄容疑で逮捕される前に「海外在住のホジ=アフメド・ヌハエフを通じて、「ラザン」一味にベレゾフスキーの注文が伝えられたのだと確信している」と直裁に語った。

しかし、それを裏書きする、ヌハエフが活着していることを示す素材は、なにも見つからず、結局ロンドン説は諦めざるを得なくなった。2008年11月に捜査委員会のアレクサンドル・バストルイキン委員長はマフムドフ事件を裁判所に引き渡すときに、こういった「われわれは誰がこの殺人を依頼したのか知らない。それはベレゾフスキーだと言う根拠をもっていない」と。いずれにしても殺害がラザンギャング団とつながりがあることははっきりしていた。実行犯の逮捕を発表

してチャイカ検事総長は「これらすべての頭についているのが チェチェン共和国出身のモスクワ犯罪グループのリーダーだ」と述べた。アトランゲリエフは、マフムドフ兄弟やハジクルバノフ、リャグゾフらの逮捕後まもなくベレゾフスキーを殺すためにロンドンに行った。つまり、まさにロシアの捜査官たちが、このすべてがアトランゲリエフで収束するとつきとめ、これをいかにしてベレゾフスキーと結びつけるか頭をひねっているときだった。アトランゲリエフは追っ手の輪が狭まっていること、まもなく逮捕されるだろうと感じていた。

これが彼のロンドンでの使命の謎を解く鍵になる。ロンドン警察が盗聴し、ベレゾフスキーに伝えられたアトランゲリエフの言葉によれば、彼はベレゾフスキーを射殺した後、身を隠すつもりはなく、投降し、20年か10年服役する、ロシア英雄になって、家族は安泰にくらせる等々・・・

モスクワで数百万ドルの家に住み、ガレージには5台も外車を持ち、安穩に暮らして尊敬もされ、不自由なく暮らしていた人間が、なぜそれらすべてをイギリスの監獄と取り替える気になったのか？ 答えは明らかだ。アトランゲリエフはモスクワで暮らしてられる日は、まもなく終わると観念し、幼い息子まで連れて、「カミカゼの使命」に掛けることにしたのだ。二つに一つだった、「ロンドンからの依頼」でポリコフスカヤを殺害した事による終身刑をくらうか、アンナ殺害の本当の動機―カディーロフに泥を塗ることが、表にばれて報復をうけるか？ それに比べたらロンドンの牢獄は、サナトリウムのようなものだ。

当然ながら、英国の特務機関は殺し屋到着のエージェント情報を受けても、チェチェン政策の細かいニュアンスまでは理解できていなかった。特務機関にとっては アトランゲリエフは、パトルシェフと直接関係がある、FSBの高位エージェントで、チェチェンでの作戦で褒賞されている者であった。アトランゲリエフが、レーニンというあだ名を持っていることから、前の時代の伝説的国際テロリスト、カルロス、またの名「イリイチ ラミレス サンチェス」の名で有名な KG Bエージェントを連想していた。それで この「レーニン卿」は、オフィスからの任務を帯びてボリスを殺すために到着したのだと断定した。なぜ今回FSBのターミネータは「ハイテク」のポロニウムを使わずに、ロンドンの場末で手に入れたなんの変哲もないピストルを使うことにしたのかということより、リトビネンコ事件の騒ぎから7ヶ月しかたないロンドンで新たなテロを起こす決断をロシア側がしたということのほうがもっと驚きだった。おそらくルビャンカ (FSB) は本格的に気が狂ってしまったのだ！と。英国政府当局で「卿」の到着の関連で何が起きていたのかについて、2009年に出た回想録において、われわれの擁護者であるジェイとコリンの指揮官である英国警察の元テロ対策局長アンディ・ヘイマンが語っている。

ヘイマンはこう書いている：「あとで問題がおきないようにスコットランド・ヤードとしては警察指導部にすべてについて報告するほかなかった・・・ホワイトホールでは、これは大騒ぎを引き起こした」2年後にヘイマンの「テロリスト狩り」という本そのものが騒ぎの元となった。国家機密法の範囲で、英国政府の要望により、その公表は検察庁により差し止められた。しかし、裁判所はこの禁止処分をとりけし、イギリス世論は大規模なテロ活動の裏側について、大英帝国の政治指導部と治安機関との絶え間ない摩擦があることについて、知ることができたのだった。リトビネンコ事件とそれに続くアトランゲリエフのエピソードについては、ヘイマンは別に一つの章をたてている。

ちなみに、アトランゲリエフも、ベレゾフスキーも、そのままの名前は本ではあげられておらず、それは刺客が何処の国から送られたのかも名指しはされていない、おそらく、この沈黙している部分が英国の国家機密なのだろう。そのかわりヘイマンはある、「殺しのプロ」が「ある国」から来た「有力者」を抹殺するためにやってきた、そのある国と英国は関係を損ないたくない、と書いた。警察ではピストルをどこで買ったのか、どこで狙っている餌食と会うつもりでいるかをつかんでいた。スコットランド・ヤードは、これに対してテロリストを現行犯逮捕するという大胆な対抗作戦をたてた。その作戦のポイントは、本に書かれていないが、その計画は外交官や政治家をヒステリー状態におとしてみたことだけが書かれている。

外務省の代表と中立地帯―首相官房でトニー・ブレアの外交顧問であるサー・ナイジェル・シェインヴァルドの仲介で交渉が行われた。ヘイマンはこう書いている―「私は、我々がこの刺客の罪の証拠をつかんでいないうちから、到着した刺客の計画を阻止するよう外務省が申し入れたことにあきれた。わたしは歯に衣着せずそう言ってやった。われわれが最初から手の内を見せてしまうなんてナンセンスだ、そのうえ、そうすることで今後起きるかもしれない犠牲を防

げるわけではないんだから、と。

サー・ナイジェルは警察を支持し、彼らは作戦の準備をはじめた。しかし、そこで邪魔がはいった。警察の計画を知った、マーガレット・ベケット外相がジョン・リード内相に電話を掛け作戦を中止するよう要求したのだ。リードはヘイマンを呼びつけ、すべて一部始終をきいたあとで、証拠が得られる前に、刺客を早い段階でとめるほうがよいと言った。

ヘイマンはへこんでいた。わたしは自分の部下たちのことを思った。ずっとロシア特務機関の後を追ってきた者たちのことを。彼らのすべての努力にもかかわらず、その掛かった魚がハリからのがれてしまったらどんなにがっかりするか、と、そしてブレア首相の判断を仰ぐようリードに提案した。トニー・ブレアは一瞬考えたが、作戦の続行を許した。

2007年6月19日は、特別なことがある様子もなく始まった。ボス(ベレゾフスキー)が出かけているときはいつもそうであるように、秘書のレーナは一人持ち場において、エレベーターに顔をむけ、オフィスの窓に背をむけていた、ロンドンのメイフェア地区の静かな横町のめだたない建物の2階全部がオフィスだった。訪問客リストには、アトランゲリエフ某なる名前があるだけだった。金曜日にイスラエルにでかけていくボスは、理由は説明せずに、この会見はとりやめしないように頼んでいった。

手持ちぶさたからレーナが、この名前をデータベースに入れると、アトランゲリエフは前にも2006年に、モスクワから何か政治的なプロジェクトの融資を求めて来たグループのメンバーとして来たことがあることが分かった。そのとき金は断られた。こういう用件のひとたちは、ときどきやってくるが、断られた後で再び現れることはなかった。しかし、アトランゲリエフは先週電話をかけてきて、ロンドンにまた来ているのでベレゾフスキーさんとお会いしたい、とても重要な用件なのだとやってきた。ボスが面会を受け入れたことにレーナはおどろかなかった、ボスはモスクワからのお客と話すのが好きなのだ。しかし、なぜ彼が、この会見を取りやめなかったのか？ロンドンに帰っているのか？ボスは予測のつかないひとだから。

おもいがけず、電話が鳴った。これはボリスだった「アトランゲリエフが電話をしてきたら約束通りわたしが待っていると言え」5分してまた電話してきた「今警察の人たちがやってくるから 入れてやってくれ、そして言われる通りにしてくれ」受話器を置くまもなく、ロビーのベルがなった。

あなたのところに数名の紳士が見えていますーと受付のアランが言った。「今、降ります」とレーナは答えて、この商売、退屈な朝もいつ何時冒険一杯の一日になってしまうか分からないわ、と思った。その後彼女は語っている「扉が開くかあかないうちに4人の図体のでかい、というか大柄の男たちがエレベーターに飛び乗り、わたしは文字通り壁に押しつぶされそうになった。わたしは小柄ではないけれど アリンコになったように感じたわ。息もできなかった。オフィスにあがると警察官たちは、作戦行動のプランを検討し始めたの」

わたしは自分の耳が信じられなかった。彼らは、この不幸なチェチェン人をどうやってひっつかまえるか、役割分担をしていたの。「おれは前から飛びかかって足を払う、おまえは右手を、おまえは左手をつかまえる」なんてぐあい。わたしはぼかんとしていました。受付から電話があって「ベレゾフスキー氏と面会に、アトランゲリエフ氏がおいでです」と知らせてきました。

「今 いきます」とレーナ。でも彼女は降りようとしなかった。そのかわりに小さなエレベーターに再び4人の警察官が乗り込んだ。静まりかえった、レーナは窓に近づいた。通りの向こう側に止めてあったワゴン車から突然建物の入り口のほうに妙な出で立ちの連中が次々にでてきた「7-8人、何かヘルメットのようなもの、メガネ、防弾チョッキ、そして自動小銃を構えて」さらに数分がたった。その連中は入り口からでて、ワゴンにもどり、去っていった。また 静まりかえった。レーナはがまんできず、下に電話した。

「アラン、何が起きてるの？」

「5人の紳士たちがはなしていますーと、受付は落ち着いて答えた。2人は立っていて3人は床に伏せていた。しば

らくしてレーナの背高のっぽのお客たちは捕虜を入り口から連れ出し、自動車に押し込んで走り去ったが、突然現れた2台のパトカーがお供をしていった。作戦の結果、警察は、犯人を2日間尋問し、投獄するに十分な証拠を集め必要なすべてを手にいれることができた。しかし、起訴しないことになり、そのかわり、入管に引き渡し、祖国への強制退去と英国入国を10年間禁ずるという措置がとられた。

アトラングリエフを起訴せずに追放するという決断は、さらにまた国際的なスキャンダルを起こしたくないという政治的判断だったろう。通常、イスラムテロの事件では容疑者は、もっと簡単な根拠でも投獄される。しかしロンドンで、クレムリンの秘密をホワイトホールが消化できる以上にたくさん知っているラザンギャング団の頭目を公開裁判にすることは、英国にとって外交上決して望ましいことではなかった。彼の始末はモスクワでつけさせればよい。アンディ・ヘイマンは、このまづいゲームで、いい地雷を取っておくことしかできなかった。「魚はハリから逃れた」が、彼は満足だった。「われわれは重要情報をごまんと得られた。狙われた餌食の命は、救われたと確信している」と誇らしげに彼は話を終えた。

「レーニン卿」の事件はブレアの外交の最後の危機だった。アトラングリエフは2007年6月21日にロンドンから追放され、ブレア政権は6月27日に辞職し、新たにゴルドン・ブラウン首相、デヴィッド・ミリバンド外相に席をゆずった。アンディ・ヘイマンのねばり強さがボリスの命を救ったのだとしたら、アトラングリエフには 死を宣告したようなものだ。アトラングリエフはロンドンに身を隠そうとして失敗した。そのことで関係者、つまり検察の捜査官、クレムリンのプーチン、グローズヌイのラムザン・カディーロフのだれもが確信した。アンナが殺されたのは、プーチンのやり方に世界が戦慄するためではなく、カディーロフをおとしめ、その結果おきる付随的な効果のためだったということだ。アンディ・ヘイマンの配下によって手錠のまま、タラップまでおくりとどけられ、モスクワに向かう飛行機に乗った、刺客になり損ないの人物はもちろん英国人の弱腰を呪っていた。現行犯でつかまって長期にわたって英国の牢に繋がれるつもりで来たのに、捕まえて尋問し、釈放してしまったのだから。

アトラングリエフが返されたことで、クレムリンも微妙な立場に立たされた。ポリトフスカヤ殺害の裏にはチェチェンのFSB協力者たちの反カディーロフの謀略があることが、明らかになればなるほど、この事件を裁判沙汰にする意味は失われた。失うものを何ももたなくなった「卿」がどう行動するか予測がたたない。裁判で その仲間マクス・ラゾフスキーのことやウグリュエフと親しいこと、アパート爆破の事などを突然いいたすかもしれない。リトビネンコに向けられた作戦の真相が、表沙汰になってしまうかも？プーチンの「チェチェン政策」すべてが世界の報道に流れてしまえば当然の結果がおきるだろう。いや、他の解決策を探さねばならない。

ロンドンから戻ったアトラングリエフは半年余り生きていた。その最期がコメルサント紙に書かれている。1月31日の夜遅く、モスクワのポヴァルスカヤ通りの「カレートヌイ・ドゥヴォール」というレストランに仕事で人に会いに行くと家人に知らせた。ボディガードは連れず、護身用のピストルだけもって行った。レストランの前の駐車場で勤務にしていた警備員によれば、「ポルシェ・カイエン」で乗り付けてきたチェチェン人は、車のなかに10分ほどいて、だれかと電話ではなしていた。卿がついに車からでると、そばに止まっていた「トヨタ・ランドクルーザー」から、コーカサス系容貌の二人の男が飛び出してきた。ひとはモヴラジ・アトラングリエフにピストルを向け、もう一人が顔面を激しく一撃。その後二人はアトラングリエフを殴打しつづけた。これはすべて駐車場の警備員の目の前で行われ、レストランの監視カメラに映っていたが セキュリティは割って入ろうとしなかった。しばらく後に「カレートヌイ・ドゥヴォール」のまえに、もう一台「カイエン」が止まった。そのドライバーは窓ガラスを開けて、二人のコーカサス系にきれいなロシア語で叫んだ。「徹底的になぐれ、こっちに引きずってこい」命令は直ちに実行され、そのあとジープ2台は都心のほうに走り去った。

アトラングリエフの家族が言うところによると、彼はチェチェンに運び去られ、拉致から5日めに殺された。ラムザン・カディーロフを排除しようと謀略を立てた共謀者たちも少なからず不幸に見舞われることになった。ルスラン・ヤマダーエフはモスクワの中心部で殺された。彼の装甲ベンツが信号でとまったときに、横から近寄ってきた刺客が、車の開いた窓に機銃掃射を浴びせた。彼の弟、スリム・ヤマダーエフは、「ヴォストーク大隊」が解散となったあと、ドバイに逃げたのだが、そこで 高級住宅の地下ガレージで射殺された。ドバイ警察は、この暗殺の糸を引いていた者として、カディーロフの従兄弟で、ロシア下院議員のアダム・デミリハノフを指名手配した。

ポルトコフスカヤ事件で逮捕されたラザンギャング団の手下たちについては、ある時期から、つまり「ロンドン説」が失敗した段階から、誰かの見えない手が系統的に捜査にブレーキをかけ、失敗させようとしてきた。「ノーヴァヤ・ガゼータ」のアンナの同僚たちは、証拠が消えてしまい、秘密データが漏れ、容疑者を打撃から救ってしまい、直接の実行犯には外国に逃げ出す可能性を与えてしまうような、この驚くべき事件の進行状況を力なくコメントすることしかできなかった。

証明しようのないベレゾフスキーの関与を証明しようとするに、捜査当局が大量の時間とエネルギーを使ってしまったことをジャーナリストたちは嘆いていた。この物語の皮肉なことは、ロンドン説がなかったら、クレムリンのゴーサインはなかっただろうし、刑事たちは実行犯を見つけることができなかっただろう、という点にある。結局、検察はあきれられるばかりの弱々しい証拠を持って裁判に臨み、被告たちは証拠の欠如により無罪となった。

「私たちは陪審員の判決を尊重する」と「ノーヴァヤ・ガゼータ」は書いた。そのほかは怒りに値する。被告が無罪になったのは、罪がないからではなく、巨大な司法という仕組みが合法的な手段では彼らの罪を証明できなかったからなのだ。これは無罪判決ではない。これはとても残酷な有罪判決だ。つまり、我が国はこのような殺人事件が、これからもあるが、その殺人者を見つけることも罰することもできないというわけだ。

歴史は仮説を許さない。ラザンギャング団の頭目、ポルトコフスカヤ殺害を依頼した者、おそらくアパート爆破事件の謎も知っていた、その人物を捕まえたイギリスが、彼をモスクワに送る決断をせず、ロンドンで公開裁判に掛けていたら、すべてはどうなっていただろうと想像してもしかたがない。残されたのはアンディ・ヘイマンの配下の者たちが彼を十分に尋問していて、アトランゲリエフはイギリスで投獄されることを夢見て、多くを彼らに語っていることだ。たとえば、FSBのどの辺のレベルまでがカディエロフに対する陰謀を、そしてポルトコフスカヤ暗殺の計画を知っていたのかを明らかにできただろう。自分のふたりの今では故人となってしまった友人たち、マクス・ラゾフスキーとゲルマン・ウグリュモフ提督とのつながりをイギリス人に説明できただろう。その二人はサーシャ・リトビネンコによると、FSBとそれに擁護されているアパート爆破をしたコーカサス系の連中とのつながりの要であったそうだ。未来の歴史家たちがルビャンカの文書庫で、これらの秘密を解き明かすところまで行き着くことはあるまい、こういうことは記録に残されないからだ。しかし、そのかわり、いつか、200年も経てば、我々のこの物騒な時代の暗黒の秘密が、スコットランド・ヤードの公開文書で出てくるだろう、パディントン・グリーンテロ対策局における「レーニン卿」の2007年6月20日、21日付け尋問調書という形で。

多忙を縫って翻訳してくださった方々に感謝します